

日本英学史学会中国・四国支部

ニューズレター

No.81

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

漱石と Dickens

田村道美

皆さま、新年あけましておめでとうございます。

昨年は本支部会員の多くがお住まいの広島市や他の地域で自然災害が相次いで発生し、多数の命が奪われました。今年は未年ですので、羊のように穏やかな一年になることを祈っております。

さて、昨年12月の例会で、漱石がA. Daudetの*The Nabob* [以下 *T.N.*]の見返しに記した書き込みについて発表いたしました。同作品の頁の余白の書き込みも取り上げる予定でしたが、時間配分がまずくできませんでした。この場をお借りして、余白書き込みについて簡単に述べさせていただきます。

73頁の余白に漱石は“Dickensianism or Yenyuism”と記しています。『漱石全集』の注には「Chap. IV ‘The Joyeuse family’において、ジョアイユーズが勤務先の社長から家族のことを尋ねられ、亡妻の医療費と三人の娘の養育費で苦しいと答えると増給を約束され有頂天になったところで夢から醒めるところ。それがディケンズ的か円遊的かの意」とあります。貧しいJoyeuseはvisionaryで、自宅から勤務先の銀行まで行く間、さまざまな夢に耽ります。楽しい夢から覚める場面を読み、漱石は三遊亭円遊の「北浜の革財布」とDickensの或る作品ないし人物を連想したようです。*T.N.*を読んだと思われる1908(明治41)年以前に漱石が確実に読んだDickensの作品は、「倫敦消息」中の「又ミカウバーと住んで居つたデヴイット、カツパーフヒールドの様な感じもする」から*David Copperfield* [以下 *D.C.*]とわかります。この作品には極貧生活にもかかわらず“in case anything turned up”が口癖の楽道家Wilkins Micawberが登場します。*D.C.*には*T.N.*のJoyeuseの夢にピッタリ対応する場面はありませんが、両者の楽道家ぶりに共通性を感じて“Dickensianism”と記したと考えられます。

漱石は英国に留学した1900年の11～12月に文学書を中心に50数冊の書籍を購入しています。その中に*D.C.*があり、それを読んでいたのが、1901年に執筆した「倫敦消息」の中で*D.C.*の人物に言及したのでしょう。残念ながら、漱石の蔵書中に*D.C.*は見当たりません。漱石は留学中に購入した書籍はほとんど持ち帰ったので、おそらく弟子に貸したまま戻ってこなかったと思われます。漱石が*D.C.*にどんな書き込みをしたのか、読むことができないだけにいっそう興味をそそられます。

最後になりましたが、皆さまの益々のご活躍を祈念するとともに、支部への一層のご支援をお願い申し上げます。

(日本英学史学会中国・四国支部支部長)

平成26年度第2回(通算71回)研究例会報告



2014年12月13日(土)、香川大学教育学部(香川県高松市)において、本年度第2回(通算第71回)研究例会が開催されました。香川大学の学生さん2名を含む11名の参加がありました。

ご発表くださった田村道美先生、松岡博信先生、会場のお世話をくださった竹中龍範先生に、心より篤くお礼申し上げます。

日時：平成26(2014)年12月13日(土) 13:00 受付開始
会場：香川大学教育学部 第3会議室(教育学部2号館2階) 〒760-8522 香川県高松市幸町1-1
共催：香川大学教育学部

プログラム：

開会行事(14:00-14:05) 支部長挨拶 田村道美(香川大学)

研究発表①(14:05-15:15) 司会 馬本 勉(県立広島大学)
「漱石と The Lotus Library (4) - The Nabob の書き込みを中心に -」
田村道美氏(香川大学名誉教授)

研究発表②(15:30-16:40) 司会 鉄森令子(広島県立祇園北高等学校)
「中浜万次郎が果たした教育的役割 - 開成所から開成学校を中心にして -」
松岡博信氏(安田女子大学)

閉会行事(16:40-17:00) 副支部長挨拶 竹中龍範(香川大学)

忘年懇親会(18:00-20:00) 香川大学食堂にて

研究発表(1) (14:05~15:15)

漱石と The Lotus Library (4) —The Nabob の書き込みを中心に—

田村道美氏 (香川大学名誉教授)

【概要】漱石が Alphonse Daudet の *The Nabob* の見返しに記した「結構ト性格に[マ]一種人巧的ノ臭味」について、第1章で Dr. Jenkins が患者の家々を訪れることで主要人物を一挙に紹介する手法と、the Nabob と呼ばれる主人公 Bernard Jansoulet の性格像と彼の辿った運命を例に挙げて説明した。また、漱石がこの作品を読んだ直接的理由として、Daudet の *Sapho* に感銘を受け、同作者による別作品を読んでみようと思ったことを挙げた。さらに、明治40~41年に *The Nabob* をはじめ the Lotus Library 収録のフランス人作家の諸作品を読んだのは、職業作家の道を選択した漱石が「新シキ小説」を求めるためではなかったかとの推測を提示した。



【参加者の感想】

◆Cassell's National Library に一区切りをつけられ、続いて Lotus Library を取り上げていただいています。漱石が独仏の文学作品を Lotus Library の英訳を通して読んだというところに関心を覚えます。その見返し等への書き込みもさることながら、漱石自身がこの Lotus Library の英訳について、訳振り等の観点から評価しているようなものはないのでしょうか。そのうえで、欲を言えば、質疑応答中でもお答えになられていたのですが、この Lotus Library による読書から漱石の作品に影響を与えたものがあれば、ぜひこれを分析していただければと期待しております。<Dragon>

◆田村先生が紫色の LOTUS LIBRARY を掌中の珠のように取り上げ見せていただいたとき、漱石の書き込みの研究に打ち込んでいられるご様子が伝わってきて感動を覚えました。数々の漱石の書き込みは、岩波文庫の『文学論』に集積されたのでしょうか。書くために読む、冷徹なまなざしを感じました。漱石の描く女性の中に投影されたのでしょうか。これから漱石のものを読むときの楽しみがふえました。謝。<東洋美人>

◆田村先生の発表を聞きながら、*The Nabob* のストーリーの中に引き込まれていきました。耳で聞きながら、まるで絵で見ていくかのように、*Nabob* であることが上流パリジャンの中で意味したことがよく伝わってきました。漱石の書き込みについて、彼は *Sapho* をより高く評価していたようですが、(Zeitgeist の相違によるのかも知れませんが) 私には *The Nabob* の方に (漱石の言う「アル人トアル物トアル意味ニ囚ワレタルガ故ニ」) より引き込まれました。Alphonse Daudet の *Le Nabab* からの英訳

だそうですが、原文と英訳とを(一部分でも)比べてみたいという気持ちが一瞬起こりました。楽しく拝聴しました。ありがとうございました。

<Qats>

◆文学に関してはよくわかりませんが、田村先生の誠実さを資料やご発表から感じました。

<Rainbow>

◆漱石の書き込みをめぐるご発表を大変興味深くうかがいました。漱石の惹かれた作品の解説をしてくださる田村先生のお話に引き込まれるようでした。

「書き込み学」という研究ジャンルがあるならば、今回のご発表は、書き込まれた書物(ドーデの英訳作品)と書き込み者(漱石)のいずれもの解釈を前に進める役割を果たすのではないのでしょうか。ドーデ英訳作品へのメモ書き込みには、漱石の小説をより深く理解するヒントがちりばめられていると思います。そうした書き込みを丹念に集めた「漱石全集」と、その分析に取り組まれた田村先生のご研究に改めて感銘を覚えました。

Lotus Library 発行社の興亡のお話も印象に残りました。ありがとうございました。<Horse>



研究発表(2) (15:30~16:40)

中浜万次郎が果たした教育的役割—開成所から開成学校を中心にして—

松岡博信氏 (安田女子大学)

【概要】本発表は、アメリカや世界事情に詳しい有能な通訳者としての中浜万次郎像ではなく、教育者としての功績に焦点を当てた。彼の知識・技能は、オックスフォード学校、バーレット・アカデミーで英語・数学・測量・航海術・造船技術などを学んだ時代とその後の度重なる航海によって培われたものである。帰国後、25歳で初めて土佐藩校「教授館」で教鞭を取り、幕府「軍艦教授所」、薩摩藩校「開成所」、土佐藩校「開成館」、そして明治政府官立「開成学校」などで教授として教えた。たとえそれぞれの在任期間は短くても、後藤象二郎、岩崎弥太郎、大島圭介、箕作麟祥など、後世に活躍する人材の育成に大きな貢献を果たした。



【参加者の感想】

◆英学の魁としてのJ.Mungを興味深く拝聴。アメリカの文化、文明の体験者であり何よりも書物を持ち帰ったことが英学のすそ野を大いに広げたと思う。其の一つが蕃書調所の手塚律蔵が我が国初の英文から直接翻刻した愛称『木の葉文典』となり、開成所の学生の必須書物となる。この本は我が国近代化への一助となったと考える。ジョン万の具体的な指導法をもっと知りたくなってきました。〈東洋美人〉

◆松岡先生の中浜万次郎(1827~1898)のご発表をとおして、万次郎の人生がよくわかりました。万次郎を見ていくいろいろな視点のうち、(英学徒のひとりとしては)やはり万次郎が身につけた英語力の面を除外できませんでした。14歳のとき仲間とともに漁に出て遭難し、救助した米国の捕鯨船の船長に気に入られてアメリカに渡ることになり、英語・数学・測量・航海術・造船技術などを学んだ点に驚きました。9歳の時に父親を亡くし、幼い時から稼ぎに出なくてはならなく、勉強経験がなかった万次郎にどうしてそんな偉業が達成できたのだろうか。(その発想の裏には、日本語で勉強がしっかりしていないと英語ができるはずがない、という前提があるようです。) 学問をしていなかった故に、言い換えるとブランクな頭脳であったからこそ、まるでネイティブのように英語で学習することができたのではないだろうか、日本語で高度に学習する前に、ネイティブ英語にエキスポーズされたのが幸いしたと言えるのではないだろうか、と感じました。プロローグとしての今回の発表は後篇が計画されるとのこと、楽しみです。学生の論文指導など多忙中の由、ご発表ありがとうございました。〈Qats〉

◆今回はプロローグということですので、次回以降で、中浜万次郎の教育者・教授者としての側面を具体的に浮き彫りにしてくださるのを楽しみにしております。また、万次郎とフリーメーソンとの関係も興味深く、こちらの解明も期待しております。

〈Emma〉

◆中浜万次郎研究へのプロローグということでしたが、残念ながら先行研究のまとめに止まっており、演題に掲げられた「教育的役割」という観点からは肩透かしをくらったような感想を持ちました。万次郎から英語を学んだ人たちのリストもあることですので、これら門下生の自伝等にこれに関する記述がないかどうか、その発掘を通し、さらに、これと東京大学の資料探究を進めて、英語教師中浜万次郎の全体像に迫っていただきたく思います。

〈Dragon〉

◆タイトルにある「開成所」と「開成学校」が別の機関であることは意外でした。日本で初めての留学生ともいえる中浜万次郎、しかも彼は日本での教育を受けることなくアメリカへ行き、英語だけでなくさまざまな知識を吸収しました。教育を受けていない彼がどのように英語を習得し教授したのかとても興味深いところです。松岡先生のお力で謎に包まれた万次郎を解明してください。万次郎がNHK大河ドラマになることを楽しみにしています。

〈Rainbow〉

◆ゲームの中での万次郎やフリーメーソンのことなど、万次郎にますます興味を抱きながら楽しくうかがいました。幕末の若者が感化された教師・万次郎の教授法などが一層明らかにされると面白いと思います。ご発表の続編を楽しみにしています。〈Horse〉

研究例会全体について

◆ご参加を予定されていたながら風邪のためご欠席となられた方もおられて、少ない人数となってしまいましたが、例会には香川大学の学生も参加してくれ、また、懇親会では香川大学ブランドの赤ワインと日本酒を、しかも前者は先月19日から販売開始となったヌーヴォー版でご賞味いただくことができ、後者も末垂れ雫という小生も初めてのものです、皆さんから好評をいただき、充実した研究例会となりました。有難うございました。〈Dragon〉

◆高松での例会参加は初めてでした。快適な環境の中での例会でした。また香川大学オリジナルワインはそのブランド名「SAUVAGEONNE SAVOUREUSE」どおりにおいしく、また「純米酒袋しぼり槽屋（ふなや）」も勝るとも劣らずの逸品でした。二時間の歓談はあっという間に、最後は、現在教育界がおかれている、なかなしく英語教育界が国際競争にさらされつつある状況を克服するべく取り組み（進行中）の談義で、しめくくりとなりました。（英学探究者である証を見ました。）事務局並びに香川大学に対して謝意を表します。ありがとうございました。

〈Qats〉

◆今回の例会の参加者は11名で少々寂しい感じでしたが、質疑応答も活発に行われ、懇親会でも香川大学の開発したワインと日本酒を味わいながら楽しい意見交換がなされ、充実した例会になったと思います。〈Emma〉

◆研究例会に参加するたびに思うのは、プログラムに記されたこと以外にも、楽しみがたくさんあると

いうことです。今回も会の前後や懇親会の席で、実に様々な情報交換の機会を持つことができ、研究のヒントを得ることができました。例えば、次のようなことがらです。

- ・英学「以前」の漢学、蘭学の時代から続く外国語との格闘姿勢から学ぶものは多い。
- ・ある土地の風土や文化は、その地の学問の歴史に影響を与え、現代の学びにもつながっている。
- ・会員の出身地や勤務地の歴史については、その方独自の情報や視点を提供していただける可能性が高い。

プログラムの中の発表はもちろんですが、それ以外にも得るものが大きいことが、私の例会参加連続記録を伸ばしているのだらうと、勝手に分析しています。今回も、皆様にたいへんお世話になりました。まことにありがとうございました。〈Horse〉



竹中龍範副支部長（閉会挨拶）

英学史学会全国ニュース

≫「日本英学史学会報」No.135

2015年1月1日発行。次の記事などが掲載されています。

《巻頭言》福井開催全国大会に思う
(会長 塩崎 智)

《福井大会特集》

- ・ふり返れば日本海（山下英一）
- ・福井大会3日目の報告（石原千里）
- 《英学史散策》
- ・学会参加の頃を振り返って（庭野吉弘）
- ・洋学史（江戸）散歩(10)：緒方洪庵（高林寺文京区）（堀孝彦）
- ・英学者本田増次郎、絵本になる！（長谷川勝政）

- ・米国探訪記：札幌農学校教授 W. P. Brooks の足跡（赤石恵一）
- 《英学史手帖》
- ・最初からオランダ語で話した堀達之助
- ・新発見資料の報告「江戸時代初期の阿蘭陀医学書」（沼倉研史）

※本部事務局発行の「日本英学史学会報」を閲覧希望の方は、支部事務局までご連絡ください。

※今回の号より、パソコンでの閲覧を希望する支部会員の方へ、「日本英学史学会報」のPDFファイルを無料で提供いたします。ご希望の方はメールにて、支部事務局までご連絡ください。
(eigaku@tom.edisc.jp)

※日本英学史学会（本部）の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要で（入会金2,000円、年会費7,000円）。

中国・四国支部ニュース

>> 『英學史論叢』第18号原稿募集について

ニューズレターNo.79, No.80 でお知らせしました通り、中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第18号(2015年5月発行予定)の原稿を募集しています。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様のご積極的なご投稿をお待ちしております。

- ・ご投稿に際しては、ニューズレターNo.79 および『英學史論叢』17号に掲載の「執筆要領」「標準書式」に従ってください。
- ・原稿提出の締め切りは、**2015年2月20日(金)**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。
- ・研究論考・研究ノートの投稿は3部、英学史随想・時評・書評の原稿は1部お送りください。

定宗一宏先生を偲ぶ「追悼記」(B5判1ページ)の締め切りは、**3月31日(火)**です。書式はニューズレターNo.79をご参照の上、郵送、もしくは電子ファイルをメールに添付して、事務局までお送りください。皆様のご寄稿をお待ちしております。

>> 平成26年度第2回理事会

2014年12月13日(土)、高松例会に先立って開催された理事会において、今年度の活動報告および平成27年度活動計画について協議しました(出席者6名)。

当日の協議とその後の調整の結果、来年度の支部総会ならびに第1回研究例会は、2015年5月23日(土)に安田女子大学(広島市)にて開催する予定となりました。第2回は12月12日(土)を第一候補に、広島市以外の地区での開催を計画いたします。詳細は本年5月の支部総会にてお知らせします。

平成27年度第1回(通算第72回)研究例会発表者募集

平成27年度第1回(通算72回)研究例会を、2015年5月23日(土)に安田女子大学(広島市安佐南区)で開催の予定です。研究発表(持ち時間は質疑応答を含めて60分程度*)を希望する会員は、(1)発表題目、(2)発表者氏名(所属)、(3)発表概要(200字程度)、(4)使用予定機器、以上4点について明記の上、事務局までお申込みください。

申し込み先 ・メール eigaku@tom.edisc.jp
・ファックス 0824-74-1724 (馬本研究室直通)
・郵送 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学馬本研究室

申し込み受付期間: **2015年2月23日(月)～3月23日(月)**

* 申込者多数の場合は、時間調整を行う場合がありますので、ご了承ください。

広島英学史の周辺(47)▼明治から戦前期までの英語教科書や独習書を集めていると、たびたび余白に書き込まれたメモを見つけます。英単語の発音がカナで記されたり、訳語が書かれていたりします。筆記体によるスペリングや、自分の名前(サイン?)を繰り返し書いたものも。▼数多くの参考書を著した木村明先生のことは、ニューズレターNo.62(2010年4月)のエッセイで触れました。それ以来、広島ゆかりの先生の著書を集めています。『1. 2. 3年の英文法』(文進堂書店、1937)の序文には、英語の文を「文法のあたま」で見る習慣をつけ、日常の解釈や英作文に応用する方法を示すことを目的とした、とあります。手にした17版は昭和16年の印刷。ページをめくると、赤鉛筆のアンダーラインや、ペン書きのスペルがあちこちに見られます。関係代名詞の課では、The ship which (that) has a long mast runs fast. という例文に触発されたか、「士官」「豫科生徒」「海軍兵学校」という文

字も。自らの進路を思い浮かべたのかもしれませんが。▼書物への書き込みは、学びの痕とともに、持ち主の思いまでも伝えてくれるようです。表紙の裏には、「楽しく」「馬」と記されており、一気に親しみが増しました。▼寒い日はまだまだ続きそうです。皆様どうかご自愛ください。(馬)

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.81

2015年1月30日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 田村 道美)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.81 January 30, 2015